

## ◆ はじめに ◆

---

ふしぎだと思うこと これが科学の芽です

よく観察してたしかめ そして考えること これが科学の茎です

そうして最後になぞがとける これが科学の花です

ともながしんいちろう  
朝永振一郎 (1974年)

(物理学者, 1906～1979年)

桜の季節になると、京都大学にはたくさんの中入生が入学してきます。私が担当している講義「臨床試験」は、医師になった後に京都大学 School of Public Health (SPH) に入った大学院生向けのものです。学生の多くは数年の臨床経験を積んでいて、臨床で生じるさまざまな疑問を解決するためにやってきます。そのような「科学の芽」を「科学の花」にしたいと思うのは当然のことです。しかし、講義を通じて知ってほしいと思っているのは、「科学の茎」にこそ真に学ぶべき価値があるということです。

本書は、これから臨床論文を読もうとするすべての医師に向けて、京都大学 SPH で用いている講義ノートに基づいて書きました。短く 30 講に区切られた形式と、数式を排除しケーススタディから学ぶスタイルを採用したのは、臨床現場の多忙さを配慮してのことです（本来、統計学は腰を落ち着けて学ぶべきものなのですが！）。

ケーススタディには、2005～2015年に Lancet や BMJ などに掲載された教科書的な 5 論文を採用しました。疾患領域は、腎疾患（第 1～11 講）、循環器疾患（第 15～19 講）、精神疾患（第 20～24 講）、がん（第 25～28 講）、歯科疾患（第 29・30 講）です。

しかし、研究者を悩ませた事例もないと議論が深まりません。そこで、生存曲線の解釈が難しかった研究（第 4 講）、主たる解析の後に 3 通りの統計解析を行ってしまった研究（第 8 講）、リスク・ベネフィット両方の評価を試みた非劣性試験（第 12 講）、製薬企業によるデータ隠しを指摘した研究（第 15 講）、チェルノブイリ原発事故後のスクリーニング効果が論議をよんだ研究（第 25 講）も紹介しました。

本書を通じて生物統計学 (biostatistics) を学ぶことで、臨床試験・メタアナリシス・疫学研究の基礎になっている方法論とその原理を理解し、論文で示されている統計解析の結果を読み取ることができるようになるでしょう。

執筆を助けていただいたすべての人に感謝します。草稿の段階で貴重なご意見をいただいた箕浦孝晃氏、今井 匠氏、レジデントノート誌の連載時から丁寧な編集をいただいた冨塚達也氏、中川由香氏には深くお礼を申し上げます。

2016年9月

田中司朗, 田中佐智子